

令和7年度加治木幼稚園研修計画

1 研究テーマ

一人一人が夢中になって、たっぷりと遊び込むために
～ 自発的な活動を生み出す環境づくりの工夫 ～

2 テーマ設定について

(1) 本園のこれまでの研修の流れ

本園では、これまで、遊びを通して「科学する心」を育むために、発達の段階を踏まえた支援の在り方について、研究を進めてきた。

また、園児一人一人の実態を共有する手立てを工夫し、子供たちのわずかな変容を見逃さない観察眼で適切な関わりを行うよう、保育者同士の連携に重点をおいた研究・実践に取り組んできた。

実際のこれまでの研究テーマは次の通りである。

令和元年度 「遊びをとおして育つ『自然との関わり・生命尊重』を目指して」
～不思議だなあと感じる気持ちを大切にしたい取組～

令和2年度 「遊びをとおして育つ『自然との関わり・生命尊重』を目指して」
～科学する心を育むために～

令和3年度 「遊びをとおして育つ『自然との関わり・生命尊重』を目指して」

令和4・5年度 「子どもの心を開く発達段階を踏まえた支援の在り方」
～声かけ、指導のバトンパス、環境構成の要素から
(ひと・もの・ことを大切に)～

令和6年度 「子どもの心を開く発達段階を踏まえた支援の在り方」
～共通理解と共通実践のための工夫・改善～

(2) 本園の実態

本園は、入園して初めて集団生活を送る子供たちがほとんどである。

幼稚園生活は大きく生活習慣にかかる部分と遊びを中心とする部分の2つで成り立っている。入園当初は食事、衣服の着脱、排泄など生活習慣にかかる部分の保育が大半を占める。これらの活動は、友だちと関わりながら遊びの流れの中で子供たちの主体的な活動として、必要感や意識、興味や関心と関連し、生活リズムに沿って展開されていく。これらが主体的な活動として、少しずつできるようになってくると同時に、徐々に遊びを中心とした保育に重点を移行していく。

また、現在の在園児は、ちょうどコロナ禍に乳幼児期を迎えたことで、人との関わりや、戸外での活動が制限された時期が長かったと思われる。そのような中、直接体験の機会が減り、スマートフォン等のメディアを見たり触れたりすることが多かったのではないかと推察する。

さらに、各家庭の教育方針、生活習慣や社会経験等は多様化している。そのため、園と保護者との信頼関係を築くとともに、保育者全員が個々の子供理解に努め、保育者と保護者が連携して教育活動の質の向上を図っていく必要がある。

園のよさを1つあげるとすれば、「根っこ力」(認知面・非認知面のバランス)をしっかりと育むために、自然体験、社会体験、鍛える体験、食育体験などの豊富な体験活動を計画的に推進していることであると捉えている。

(3) テーマ設定の理由

これまでの研修の成果と課題、園の実態を踏まえた上で、本年度のテーマを設定した。テーマは次の通りである。

一人一人が夢中になって、たっぷりと遊び込むために
～自発的な活動を生み出す環境づくりの工夫～

子供は、環境と関わりながら、自発的な活動（遊び）をとおして学ぶものである。（出会う）
自発的に遊ぶ姿を、一人一人が夢中になって、たっぷりと遊び込む姿であると捉えた。

遊びを中心とした幼稚園生活を通して、子供の発達を促すためには、子供の関心を引き出すようなものや出来事などと出会える環境が重要である。子供はその環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして試行錯誤したり、考えたりするようになる。そのために、子供が自ら関わり、充実感や満足感を味わうことができ、心ゆくまで十分に遊びに取り組めるような場や素材、時間を設定していきたい。（関わる・動く）

環境構成を行うに当たっては、資質・能力が育まれる環境になっているか、子供にとって魅力ある環境になっているかということ大切にしたい。認知面である気付きと思考、非認知面である学びに向かう力の双方を、計画的・具体的な活動を通して導くことで幼児期に育みたい10の姿につなげたいと考える。（膨らむ）

また、一人一人が夢中になるためには、個々の子供理解に基づく信頼関係作りや保育者同士の共通理解・共通実践が不可欠である。保育者は、子供たちにとって最も身近に関わりの深い人的環境であるということを全職員で理解し、子供たちと関わりたい。

さらに、子供たちは、生活経験や興味・関心などが異なり、発達の特性や個性もそれぞれである。幼稚園は集団の教育力を生かす場であるので、一人一人の発達の特性を生かす集団作りを意識しながら保育を展開していく必要がある。（広がる）

3 研究の内容

【キーワード】

出会う ➡ 関わる ➡ 動く ➡ 膨らむ ➡ 広がる

(1) 育みたい資質・能力を視点にした環境づくり（図1 参照）

ア 指導計画に基づく短期・長期の保育実践研究

イ ドキュメンテーションの作成（年2回の研修・HP等）

育
み
た
い
資
質
・
能
力

【知識及び技能の基礎】

豊かな体験を通じて、子供自ら感じたり、気付いたり、分かたり
できるようになったりすること。

【思考力・判断力・表現力の基礎】

気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、
試したり、工夫したり、表現したりすること

【学びに向かう力・人間性等】

心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとすること。
頑張る力

《 図1 育みたい資質・能力 》

(2) 保育者全員による園児理解の在り方

ア 保育ウェビングによる園児理解（4・5・9・1・2月）

イ 職員朝会等での日々の情報共有

ウ 各活動紹介（園だより、クラスだより、ミーティング等）

(3) 一人一人の発達の特性を生かす集団作り

ア 発達段階と集団の実態を踏まえた学級経営

イ 保護者面談の実施（年2回）

ウ コミュニケーションタイムの活用（週3回）

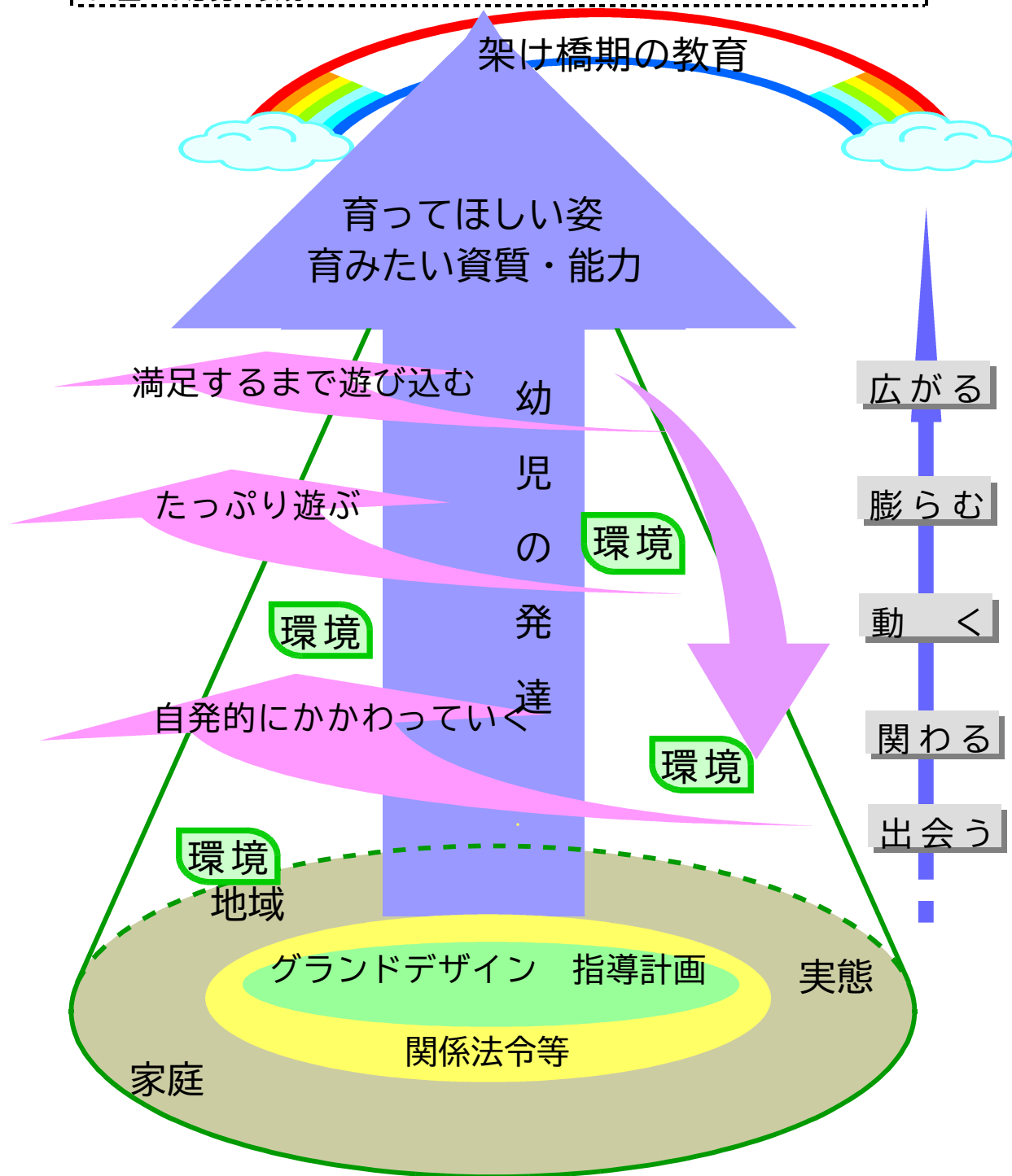
エ 療育機関との連携や巡回相談の活用

オ 園児降園後の職員による情報交換

4 研究の構想

●育てほしい10の姿

- A 健康な心と体 B 自立心 C 協同性 D 道徳性・規範意識の芽生え
E 社会生活との関わり F 思考力の芽生え G 自然との関わり・生命尊重
H 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 I 言葉による伝え合い
J 豊かな感覚と表現



●子供にとっての環境とは

子供の周りにある様々な事象、生き物、他者、自然現象、社会現象など全ての「もの・人・こと」

●魅力ある環境構成とは

- 1 子供の興味や欲求に応じた環境
- 2 子供の発達の時期に即した環境
- 3 子供にとって新しい出会いがある環境

5 一般研修を含む年間研修計画

月	日	研 修 内 容	備 考
4	18	○子供理解～個人面談を終えて～ ○研修の具体的計画検討	・ 子供の特性や家庭との連携状況の共通理解 ・ 学級経営案作成
5	27	○実践報告会① ～共通理解と共通実践のために～	・ 各組の年度当初の様子から 保育ウェビング等
	28	◎第1回幼保小連携研修会	・ 竜門小
	下	○給食指導・食に関する研修	◆講師招聘（給食センター栄養教諭）
6	4	○救急救命・水難事故防止研修	・ 消防庁HPよりオンデマンド研修
	5	○実習生研究保育・保育研究①	・ 保育実践・指導案作成 (5/26～6/6 鹿女短1名)
7	8	○図画作品の園内審査	・ 10日市審査会
	11	○子供理解◇ドキュメンテーション◇ ～子供の心を開く支援の在り方～	・ 1学期末の各クラスの子どもたちの様子について
	22	◎市幼稚園教諭等研集会 ◎地区教育研修会	・ 始良公民館（講師招聘）
	5	◎県幼稚園教育課程研究協議会	・ 始良公民館
8	21	○教育課程研修（Ⅰ・Ⅱ期）	・ 1学期の教育課程の成果と課題
	25	◎保育技術協議会	・ 県市町村自治会館
9	1	○夏季休業中の研修会の報告 ○子供理解～2学期の支援のあり方～	・ 研修内容の共有と実践事項の確認 ・ 指導方法の具体的確認と検討
	30	○テーマ研究について	・ 中間反省と今後の取り組みについて
10	22	○実習生研究保育・保育研究②	・ 保育実践・指導案作成 (10/10～10/24 第一幼短2名)
	23	◎第2回市幼保小連携研修会	・ 始良公民館
	24	○実習生研究保育・保育研究③	
11	14	○生活発表会の進め方について ○教育課程編成について	・ 指導方法の具体的確認と検討
12	17	○子供理解◇ドキュメンテーション◇ ○教育論文のまとめ	・ 2学期末の各クラスの子どもたちの様子について ・ 個人研究テーマによる
	24	○保護者アンケートの集計結果分析 ○教育課程研修（Ⅲ期・Ⅳ期）	・ 二者の自己評価実施（職員・保護者） ・ 2学期の教育課程の成果と課題
1	8	○子供理解 ～共通理解と共通実践のために～	・ 3学期の各クラスの子供たちの様子について
	26	○人権教育研修	◆講師招聘
	28	◎幼保小連携研修会	・ せんとり保育園
2	25	○子供理解 ～子どもの心を開く支援の在り方～	・ 次年度へ向けての方向性確認
3	6	○教育課程研修（Ⅴ期）	・ 3学期の教育課程について検討 ・ 教育課程編成作業
	25	○年間保育の反省と次年度の研修計画について	・ 令和8年度教育課程完成